

富山再訪記

——塾長に隨行して——

坂村儀太郎

昭和十五年十一月四日午前八時三十分上野發・秋色深き沿道風景に旅情を慰められつゝ、薬師富山に入る。昭和十年六月以來五年振の塾長來富に喜び合ふ同窓諸氏に擁せられつゝ、電氣ビルホテルに向つた。途中驛より正村六之助氏が出迎へ、ホテルに於ては高岡高商の大熊信行氏その他數氏の方々が加り樂しき食卓を圍んだ。

高岡高商記念講演會

翌五日も快晴である。出發の際北陸は雨が多く陽氣も寒からうから雨具と多仕度をするようにいふ藤原銀次郎さんからの注意もあつて其準備に身を圍めて來た小泉塾長も案外の面持である。いや藤原さんの注意が間違つて

ゐたのではない、北陸地方にも珍しい好天氣だのだと土地の人は語つてゐた。旅運に恵れたわけである。早朝富山を立つて高岡に向つた。高岡高商校長堀池英一氏並に同校教員諸氏、木津高岡市長、地元三田會員諸氏の歡迎裡に高商に赴き同校全學生約六百名に對して小泉塾長は「福澤先生と東亞問題」と題する講演を試み、終つて靈食を饗せられ、同校教員諸氏と座談を交へた。本年は同校の創立十五周年に當るので塾長は其式典に參列するやう懇望されてゐたが、それが希望通りゆかずこの記念講演となつたものである。何しろ一年半前から依頼されてゐた事が今日實現を見たわけ、同校校長の感謝もさる事ながら塾長の満足もさこそと頷かれた。

富山石川合同三田會

見學に身が入りすぎて高岡に戻つたのが六時過ぎで富山、石川兩縣三田會會場延對寺料亭にかけこむ。待ち飽くんだ幹事諸氏の顔がサツト紅潮する。廊下のザハメキ、參會者の歡聲、直ちに二階大廣間に於て塾長歡迎會を

開催した。出席者は遠路參會の金澤三田會員十五六名、高商の諸氏を加へて五十餘名の大饗宴、熱面の人多く感懐が深い。金澤の長老萬西慶太郎氏の歡迎の辭があり、それに對して塾長が答辭をのべ、宴半ば正村氏が起つて義塾維持會の使命を論じ、義塾發展の原動力たる維持會の擴大強化とそれの加入こそ義塾に酬ゆる所以であり、國家に報ずる一端であるを力説し、滿座の贊同を浴びて蕭席して記念攝影を行つた。

兩縣會員の間に野球試合の話が成立するかと思へば、やがて塾長を圍んでの談笑が起る。母校愛の汲めども盡きぬ盃は様々となつて交錯し、いつもながらの美しい三田會風景を呈して高商の人も羨望する有様であつた。名残は盡きないが金澤行の列車の時間も残り、義塾萬歲、高岡高商萬歲、兩縣三田會萬歲を高唱して席を捨て高岡を出發し、三日市乗換へ宇奈月温泉に至り延對寺別館に投宿、時刻はもう十一時近くで、黒部川の水音、涼々として枕を打つ。

黒部境の探勝

六日早朝、日本電力の厚意で正村氏同導、黒部川溪谷の探勝と發電所の見學に出掛ける。

日電の専用軌道車に乗り宇奈月より小屋平に出でエレベーターで二百米の高所に登り、釋平よりトロッキで長さ六哩に及ぶ隧道を潛り人見平の第三發電所に至る。この所要時間約四時間、これこそ越中人士が世界に誇る難工事とは寧ろ聞いてゐたが來て見て始めて知る辛酸の數々、規模の壯大、ただただ驚くの外はない。中でも最後のコース釋平より人見平に通ずる工事こそ驚異に價するものである。この工事着手は昭和十一年と云ふから滿四年前釋平の一角に斧を入れ大自然の猛威と戦ひつゝ、黒部溪谷奥地へ奥地へと掘り進む中突如高熱百五十度の地獄の中心に突き當つたのである。一旦志した計畫とは云へ日に増す犠牲者の慘憺たる有様を見ては決心はにぶり、一時は全く絶望とさへ思はれたが、不屈不屈の越中魂は遂にこの隧道を貫通して世人をアツト云はしめたといふことである。

六哩の隧道の通過時間は約四十分、たゞ暗い冷いジメ／＼した地底の連續で、そして其最後に近づく頃地熱が次第に高まり、硫黄の臭氣が鼻をつき始めたと思ふとたんに、カツト熱くなつた。その上熱湯が砂をまじえてバラ／＼と降つて來た。ハット驚き用意の合羽を頭からかむ。トラツク上の一行は頓轍

中の兵士の様に打伏せになる、顔も手足も燒け爛れ息もつまるかと思ふ。一分、二分、三分、不安と恐怖に戰く身には數分と雖もとても長く感じる。パツト前面が明情くなつた。隧道を突破したのだ。そこに展開したのが人見平の作業場である。

振り返つて隧道を見返れば排氣裝置を通して滾々たる湯氣が唸りを生じて排出してゐる。これは灼熱の岩石を冷やすため落差を利用して水を掛け忽ち起る湯氣を排出せしめてゐるのだと聞いた。

發電所において持參の辨當を喫し工事を觀察、年内九萬キロの發電工事の完成を目指して工事を急ぐ従業員諸氏の勇しい活動ダイナマイトの炸裂、巨大なる堰に喰ひ止められた満々たる水、そしてこの人間の飽くなき努力と科學の力とを、高嶺の斷崖はジツト見つめてゐるかに見える。

再び燒熱地獄をくぐり四時すぎ宇奈月に歸館した。錦を綴る溪谷の勝景、黒部を見ずして溪谷美を語るなかれと入口に膾炙された其景觀もさる事ながら筆者は寧ろ水電王國富山の將來性と、科學の必要性と、不屈不屈の越中魂にうづくが如き幾多の感動に胸高ぶらせつゝ、東京への歸路についた。